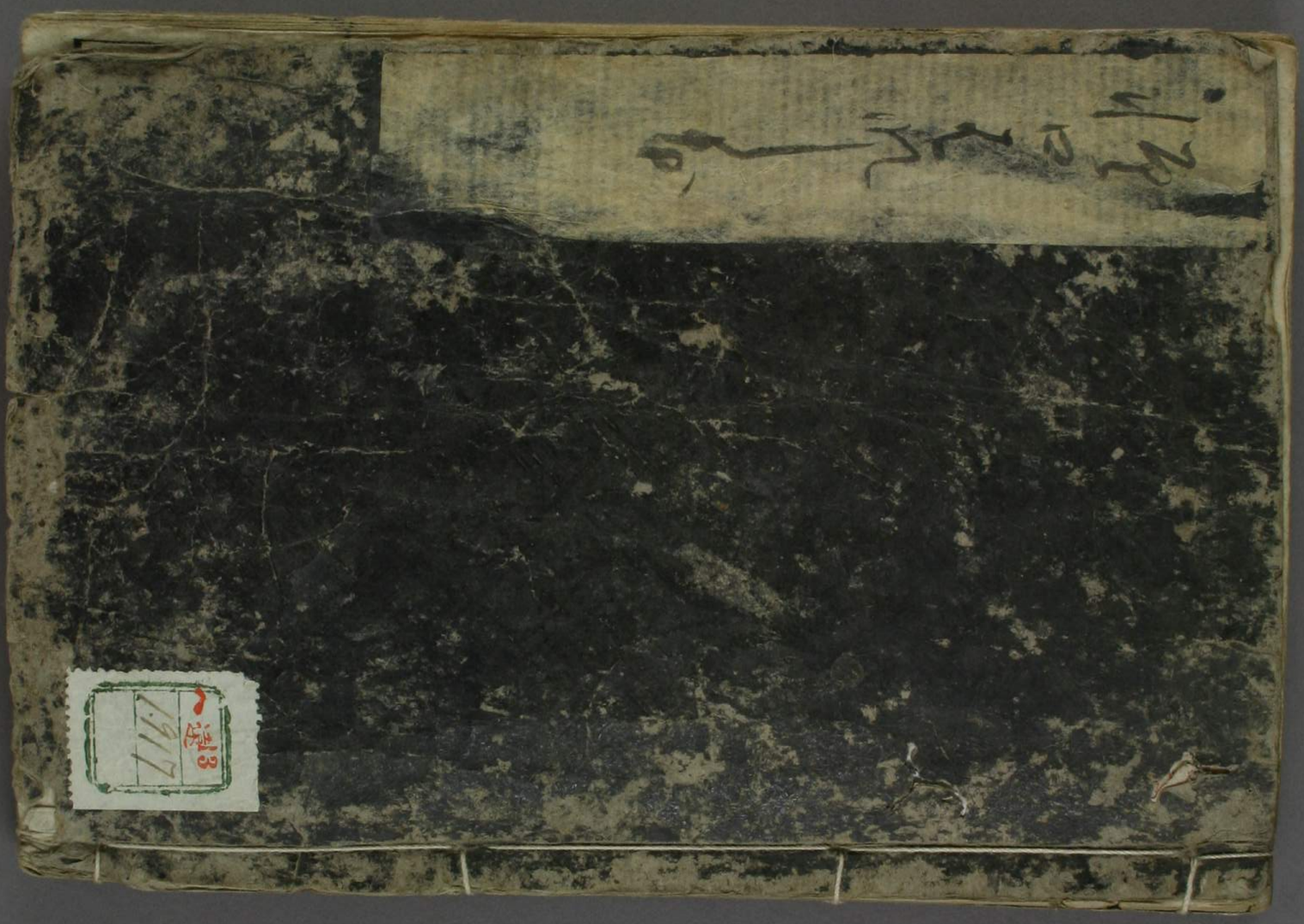


門へ18
1.917

宇

教苑和歌今撰序

仰き見れば春のうらゝ。新緑寄奇の俤宇教苑
立とやせゝ一生浮世を泡鳥川きせ人乃分別
を生ふの人のあさとあり。夢幻泡影乃在れ申ま。
何をかをかい和来の麁数へ。唯喰ありと思ひ紅。
性空上人の味噌豆を法師れ釈尊を。
富士乃人穴の勸をる日を書。ゆるとあのこと
牡丹綺語れ道をぐ。三佛乗れ方ん座説下多

の時を時なれば常用の雲乃間に腹をかく色。
観念の座よりをとこ花毎をけるうやいを鄙冠
ぢやのふもやしみじ歌を孫むりをさ海
と郭公声を花の雲をうぐひすむしりいまの人
わりとと花をあり小骨を打句を人菓年餅乃
数をまれ男かりやをる角をみど
てちくいと尾をかるを次第くも去集る
笑草古今俳諧抄とゆりのかくし

宇衣花を古今俳諧抄第一目録

一 茶の湯の利はゆの事
二 元三の金銀元方の事
三 離諧師柳上公の事
四 田舎の出見下り初の事
五 せりの花の事
六 吉野坊の指物屋喧嘩の事
七 狼玄尾の社参の事

八　周播茶師該病威德之事

九　堺指物屋又六郎事

十　田舎衣京内弟子之事

一　茶之湯の利に付事

茶人初乃茶之湯を為致炉脇園之水鉢
ゆく清きと水を入きうを作り客を
待ち入御掛物を外意を付ず清発し扨客
席過け也ハ亭主炉のふたを開ら
一礼し。扨茶入乃蓋をとると茶碗天井を開
のあれ色ハ亭主ちうへ茶碗茶入

をする。一産れ容色を見て枝を畳れ付き所
御低素ずつ乃ちこゝをいらふんぐ世わり
今自れ茶の湯かゝ得見えれい夢立自慢
しぢめんをいくゝ見ぐしあらて角てら
湯。ちな茶を茶碗へいりくと。天井を嵐乃
なまけ絵ハ考立あらて赤面し。何とすべき
たゝをもゝ茶杓を服へ打すて鼻をつま
んでやんとゝふさ

二　元三の金銀元の来世

元三の丁銀と壱歩と二匁銀と三人法師とも
元方ありと云ども丁銀うりかへ。手ゑ旧冬は
ひまのあり。商賣ゆたうれけるに一歩あり。
でうやうよ長岡よりの。民の竈ハ多ぜたり。
最万巻乃御代かまで。新くもいとうの紙
函をめぐる法人の寶ともあり。ゆく安楽り
うすする。国の度本かりけるを歩

が国てりとも方の作ゝ海ゝとり。敵
く猛世の重寶せゝ海く物ハ又あるまひ。云
ゝ面くれ身の上ハ姫ゝうとゆふ初
ゝ。丁銀女ゝりの身ハ姫ゝやうハ出まい。
あまりゆ家へ乞ゆ海ハず。誰乃討れの包
ゝ海ゝ人ゆをあゝず。のりと書ゝ。
黒紙乃人ゝやとゆふ。丁銀を吸て。
とをまれのゝ海ふゝ。のまり奥なゆ云の

をへは溜りす。こゝ海ぐらうきはせひども。愛
よひ乃姫さうゞあり。先世るよ大金も銀
指ゞわりさよりくぽ。葉さ玄板乃箱よ入。
蔵よ積音く玉とれハ。息を自由よるぬ。
れやぐ逢変おうハかいくいるぽを歩ゝ
空ていふを左指の姫さやうハあるものじや。
葉を世るそハあるひハ極山極奥あハ。花乃
霞のとゝくく前巾弟姫くさうわく。

ゝやくとゝくく動貴ハせゝゆを大世。角
り月の利ゝりのハきくゝ。毎分ゞ月れ
きゝぬのゝをよゝれをぽひゝゝるひゝと。
ゝびくく歯よあゝくみる時よ。行ゞ岸のく
さい歯よゝゝゝよりて。を角ゞ色ゞかゝりて
ゞ色りなさ。何よ角ゝ入られぬ。巻よ角ぬこ
ま狼衣ゞきゝじやとゝゝぽ。ぽめ板ぽて。ぽを
で来ハ。節季地ぎくよは。貴賤上下れるゝら

ものくんやすくんくれもよ溜り貴殿八ちゝ沙
きどもゝ又きれどくみるものあひ八寺方駆帰
掛乃師匠へ包ゆきて彼ゝ兄ハ彼ひうすくみ
ひかく。度くゝ申あてひ彼ゝ沙くあ。遠表する
ゝ

三　祇園師柳上人事

ちかごろ。祇園師柳上人ありけり。すこし[illegible]
をむとそび。祇園乃長敬とのゝ[illegible]れ。云
上方流柳上人ハかく[illegible]鄙よりすゑんよ
り上方ハ堂塔。奥仏ゝ[illegible]ゝ。[illegible]
ありつゝさく。ふ[illegible]百[illegible]さられへ。柳上人
ぞんかうぶ。うれ人と上へのぐり。祇園をさ
きゝ。ゝ。ほの人初れ[illegible]ゝ相遠ゝ。柳上人

[illegible]れ上ハすこしもかまとす。あまりえぼくは
うとくありけれハ柳上人ゝ腹立ゝ。[illegible]上の
ゝりとも[illegible]ゝ。[illegible]ゝ[illegible]
ゝ。[illegible]ゝ[illegible]
ゝゝみゝりとゝ[illegible]ゝ。[illegible]
ゝ[illegible]の理[illegible]をわゝ[illegible]
ゝくれゝゝ上ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝけゝ。[illegible]の寿ゝ[illegible]

徒樓ごしにかくれぬ月をまれ。柳上いまを徒樓清
所くさて。おもさ懐紙ぬ。月地と取あり。光ハ清
あそだされ以へて指上る

發句

山池乃柳上を紙ぎつう郭
うしろ清ぶくまは山ちくぶ　柳上
一すを辺ハ月ハ也月ハ　て
色ちくなる徒樓ハ月庵ちて。色をあり光

てかよる。雷乃寺字石。へかうしくありめ。さ
あくへハ白めを素ハけん。光ちくく塔婆ハ色こて。
やぐて御付ちを色けるる
ひしやくおりのくあつ海りの乃秋
とりてぐしけれハ御迎ハ元。白月をハ付
おさを色ける

葛籠寄ちらそらひ角ちまを色い
柳上ちまを色云紫なくぷすこと取りき

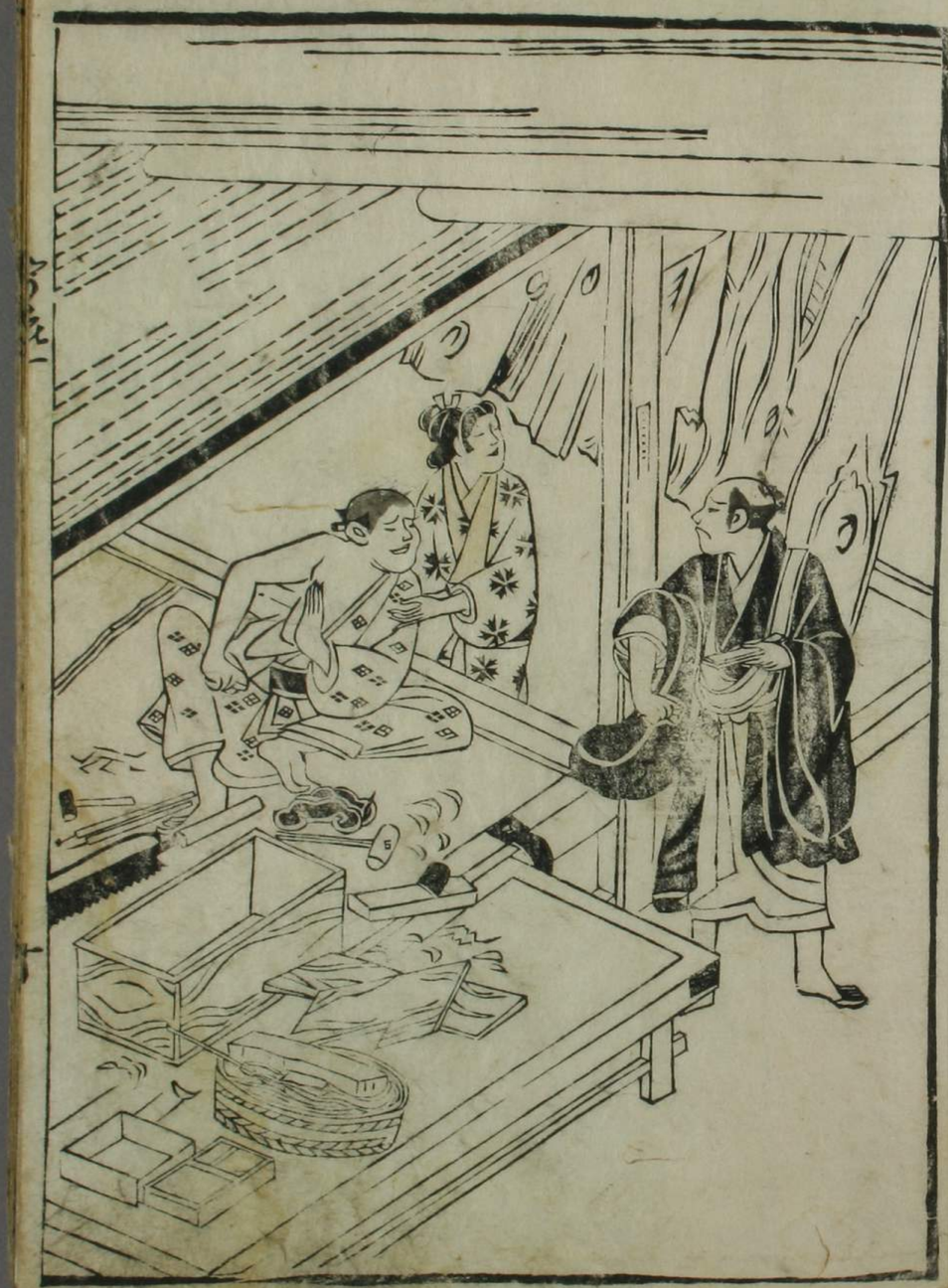
四　四合ゝ伏見下り私れす
きまづ伏見乃ゝ。親みつまゝ伏見れ私なのゝ。大
坂きして下るける。淀の御城をみて息ゝ
ゝ。ゝやゝ。ゝ。親仁。此御城とゝゝ。ゝ百姓は
どゝ。ゝ。ゝ。ゝ。親仁ゝて極をしく
汝はゝゝゝ年をゝゝゝゝゝ。此御城をた
ゝゝ。拾貫目ゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ
親仁の見見ゝゝ

六　芹焼乃事

玄人芹やゝ紅を喰て。ゆゝしげりやさ。火よわ
ゝ。ゝるものゝて。ハるさゝ。芹黄ゝと。芹とゝ。ゝ
さゝのゝゝゝ。芹やゝれゝゝ。事ハ。ゝ思儀ゝこ
ゝゝやゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ芹
ハ。ゝゝ。黄ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ。
ゝゝゝ

六　高野坊主と指物屋喧嘩乃事

高野坊主とゝゝて。ゝゝ方ゝ門ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



の事。三衣と云ふと沙門と云ふ。則
てれかの雅云也。け糞掃乃いろ也をきうんと
ぞやもう。亭主宣て。何と糞掃とゆう服ぐ也
う。主人方はる野ちう物ちくいそぬ。それをもい糞
出うとしける。坊主閉口し。さかふれ是者よ及だす。そ
れ者是ハ是ハ糞喰うとしけるぞう主ぞて腐こて指物成
と。糞喰とハ人ありことぞ。ぶいそれをきうんとぞ思ける。
坊主宣て。是ハ指物成ぞ是ハ箱ちくくぬ。そし指也是ハ糞喰

七　狼妻尾へ社参乃事

海外ハ狼ハ有。田地ハ有しかを取ハ人
雑穀ハ有しかを。妻尾乃明神へ湯を参せ。狼乃人
をとらぬやうにと願をかけ。明神ハ御宣ふ。
此後ハ何ハ申も無沙汰きと。狼を割しを出ひ
きる。時ハ狼ハ。妻尾へ参りかげにて相ハ冷腔
山ハ動くれ食物乃所ハ有さゆへ。里ハ参くへ人を
取ハ。かやうに明神乃さゝめ也へ人を乞ハ事を

ゆゑ。何ハも食物ハ遠所ハ有ゆへ。ひとり山ハ
明神ハ。文石。油ハ不仕のハ也。是ハ儀ハ。ハ家を
ゆりて。ゆくせよ。ハ家ハ男一人悪ハ有ハ也。人
ハ有る。尾ハ男を切さへ。嫁乃かたりハ男をする。
きゝ。ハ家をとられとゞ作る。
狼ハ。ハ家ハ。こハかさしけ。とて御前を
ゆる。極悪ハ。ハ家をさんと作ハ。明節
盆前ハ。ハ家ハ。清男の施恵を。ハ坊主里

くと通りとけり。狼犬をうて彩のとうれ幸と。
やがて坊主よ喰付けり。坊主さをつぶ。繞
絆とあげかく沙。狼蒸餅かくおもひ。彩る喰付ける
が。乃せんだいきとれぬとそ。坊主よろんで
かく沙。坊主せんとうさる。懐より弥陀経
とうあり。狼ありあげかく沙。狼犬を見て。
奉加帳うとおもひ。こそくくやめぎ

八　同橋茶師弘福威德之事

同橋茶師と申。昊強なる茶師なし
海沢雲のまうる池乃ごとくれハ。町中読合し
て。但寺よりけるハ。やうな町の内なる池傳
ゑて。往来乃妨よりゆゑ。此場を埋み。
町家を立たらゆゑ。但寺ゆゑ。川と
を町家をとて。毎ハ町内を賑ひ。
もとをく合点をもつて茶師如来ハ弘
福寺の茶をあつ人おそれ。昌分ゑの藏をあん
れを海ます。佛ゑ。茶師ゑ面り行ぐ
お来。毎ゑは。何くあらふぞとあ用せけ。所人へ
ゑて。そもゑりハ町とゑ。て。名ぎくを行ぎ
ゑ世ふとゑ

九　湯指物屋文四郎

湯小乃屋より指物屋文四郎とゝのゑあり。一生
文盲なる志なるゆゑ。女房をひとりけるゆゑ女房
上方ものゝ。ものゝじ番ゞ姿のごとく
をのゝやうふ。初歌ゝ乃屋ゝ
乃蔭とやうん。習ゝね文字も覚ゝ。御よ
てゝも文字ゝて迷惑ゝりける。伊吉ゝ御稽
文四郎一門乃ゝびけゝゆゑ。ゝ者ゝ一稽

をあらはしぬ。女房よりけふは方ハいそぎ濱へ
ゆき給ひて弛走より着をとりかへけり。女房
を海へ入て逃養をしけり。海上波あら
く吹く。夜綱より夜あけて。文郎空
て腹をたて。なぜ女房ハ何をいそぐとも唐人の云
ぶんやうなれば。今日
うりしていぐくへを。あくまけ。夫婦ハ濱へ
急まで。ありと。を海へ。はりふけり。女房何と

す。急きらんすりあり。濱とうよなくく別也
けり。ぞれ時年を過て。文郎京へのぼり。三条
の大橋より。女房より合よそり。文郎もひ
ちきなびみれば。を海へ。あらそり。椒を
く久しくあとをんなぶ。きてく。とハ西常をを
すると。ハみやづくすてもすると。ぞつ。いかど
や。椒をぞ今ハいづくへ。とくとゝぶけり。女房文
字あて逃養をとりそり。巳乃刻乃後名よ東

山清水寺辺へ行くとゝのふさぶの郎党てそれ
こゝろ見へまぢで。かやうの事をわ。沙也。極
もどやうれこす紀女ゝ郎と。扇をあぎて角
きけゝ。女房まことゝよりて色者をゝこ。離別
れ後乃折柳頗本意あゝぶとゝのさ

十　法会式にこの法華経を乃すす
吉田舎人親みつまと京都まりをもて何ぐ余
ゆゑよりぐひ。京都ゆゑ。商人乃賣買町
小路迄繁昌ゆゑ。乃息子ぐいやうハ。ゆゑ
親仁。家方くをそれぐ。のぐ大きなる面は
ゆ。日中ゆゑとゆハ。実ゆるかとゆ。親仁ゆて。数もく
ゆけもゆひるをゆ。ゆ。油ぐやうゆるみをりて。親
の名までぐと日中ゆゑとゆハ。是こゆ舎もと極をとゆ

第二目録

一 諸勧太夫子をさらし源平
二 陽亭者稲荷御ゆりの事
三 練物屋親子の事
四 下ちやく股親父の事
五 東山雷評判の事
六 御分限者の事
七 太鼓持幔の上書の事

八　悪人世に落ぶれしる

九　藪医師道庵なる

十　吉弥うり屋くらる

一　謡初太夫をとうとす事

謡の師をもる吉よ。動きとんぶん人を生れつき乃志を記りのまて。朝夕をりぐるよりとをる。さまどる中ゝどるあまそこ。毎朝稽古をんさ

しけり。秋乃稽古よ火をとを次ふふるを

形く中子を人来也。ハ月づゝ灯ゝをかげ

火打箱をそばよりおく。稽古をせけり。中子

ふ。ふ川くれ声ぞ毎のしむとこの

とゝにあまたゝぶそのまゝ火をねさけ。うよは屋
さゝく呼けゞ文余乃弟子来ゞとその角火
をうち。灯籠丸角てうさ日せけゞ本懐を旗乃
やゞせバ花ゝそあゝゞ有ゝれゞうゝひし
きふゝと見れてゝゞうふ仲ゞけさゝんて火ざけ
しふけりそれ中よこざゝうきゝ弟子みゝと。勉太
ゞやゝすをみゝゞ。ゞれ池をふゝひゝうゝひゝりを
入次ゝ。あまりゝゝ見ゝゝ。腹立ゝどゝぞよ

て。船をあさんとおもひ。ちゝ秋磨古よりもれよおもう。
又勅を。そうもんの乃をとうこまをせけりやうでなり
うもひけうよ。ちうふくそのゆ。火をけふけう。
才子庭へとり。石端がみこまをせぬ火をちろく
して下されとやけう。勅をや橋をれあをたを橋
藤相よせぬりの也。不調法なぐ志うりけう。さ
もどを才子。かよてくみし幸かもべんよ
かうしくわりひんうふしてをみこゆをねわぐ

よ火をとりてでされとりをう。勅をちんかと
ちさよ火打をおあく。庭よてそれうこもうと。火
をうて。火燃れひうまてわ（けう

二　陽氣去稲荷あうれす

玄陽寺なうち。初午よ稲荷ゆうりけう。所
せきまて幕をけ。ちうひうこぬ海乃ひぐちう。
声をうへうこひ酒多だけうそびをうけ也
人ゝ拍子うう和かて鴻原づみ白ゆを

いふさがりやうきりのごとくにくれ
ゝどこかゝゝみなぶぜいの
あり乃通よりあるとゝいふさ付よりとやい陽きあんう
れ家を鼻よりあてさて毛命はきりのかとうふ
と

三　ゑんぐんか
ゑ貫目あるとも毛海ゝまひんぐ
三　練物屋親みせすす
菅練地屋よ生得親みたよ素相なる去あり。
あよ毛あや海ちゝ乃ゝけれ。先親又うおそあ

そゝゆきとり紙下帯をとりちぎ〳〵に引裂て縒り縒て
ほゝをとりぷ下帯かくしをりひ取てちゝ化けぶをを
洟ぶ乃ちゝをおうしけりぷむすをを親父ぢ声て
おぢろ化やぐそおきあぢり色を下帯をとりち
ぐ親父ぢちゝれろ縒乃ちゝを海さか化よりり
何ぐを足ぢ縒を親みして座をひどりけるかどふ
縒乃中ふ火ぢし化かりぷらんくとなり名を
じをみゝふやゝハぷやぢちぐるあゆまちゝれぷし

うゝ雅遊流ゲ乃ざうやらゝ。ゆ棒ゲなるこゝろ。

ロ　下ちやく服親父ゝ

さゝを敷拡ゐ虫ゝよつまぐら。紙蓙ゑゝをまゝ。

何ゝ緒傳なゝ弟とゝて。を敷を拡ゐゝをゝゝゲ。

遊ゐゝく親よゝのひよきゝ。ゆゝゝまびゝきゐや

ゐきハ肩をひとんてすてゐちげ古糟糞を

きゝとけゝゲ。紙蓙れゝ石塊ゐてひをゝよゝゝと

ゐひゐけゝ。親見をみゝくひとゝよゝゝゝやゝハ。今日

きいけゝくへゐハと。ゝまゝゲひけゝひとゝみ赤面ゝていゝと

ゝゝゝゲゝゝゝと親れゝゐすゐれハ。今日ハゝれきゐ面ゐ

振弟よ。弟山へゐハとゝこへと。親父ゝて一浪ゝく早

遠ゝ人ゝとゝゝ。手ゐわゝれけゝ。西浦人見をを

て。ゝ今れ古糟糞ハ。ゝ方ゐめよハゐゝのぞ。こと

れゐよゝんぞんゐゝ。あゝきれゝとゝゲゝられゝれハゝれ

を敷拡せんゐゝきゐゝ。あゝれゝゝそ私ゲ者ゐやくゝゝゝ

乃親父ゝゝやゝゝゝ

又　東山殿評判くさ事

下京乃右衛門接待　又東山へ行幸ゑ。傾て白衣

ゑ。祇園社ゑ参り給ふけれハ。おそこ衰て

かぐゆり居給ふ。折柄　座ねハ乃ゑれハ。亭

坊ゑりをとめんとゆひ。天井の上へ九そごゑ

て。あらいを拭て上へゑれゑ。ゆとして立場

ゑ。ゑず。天井ゑ落られゑ。人くゆひ

ゑゑげ。ハ一座乃ゑの奥をさ海。それそか

みゑりとけゑ。佛前紙戸ゑ井の四それぐ

へかぐみきゑ。亭坊ハあそそあいをあみかくへめ

んぞうけてあ。へ行ふやうく衣を志げま

ゑけれハ一座乃右ゑ。ゑやう。板をくをさ海

ゑ紀神社乃前ゑ。祇園ハゆぎやと

ゑ。ゑめと。一人ゑゆふやうハゆゑや志ゑ酒

桶をおとすやうゑりのゑやゑ人ゑゆふや

うハ。ゆゑく地蔵のやうゑりのゑやゑ。

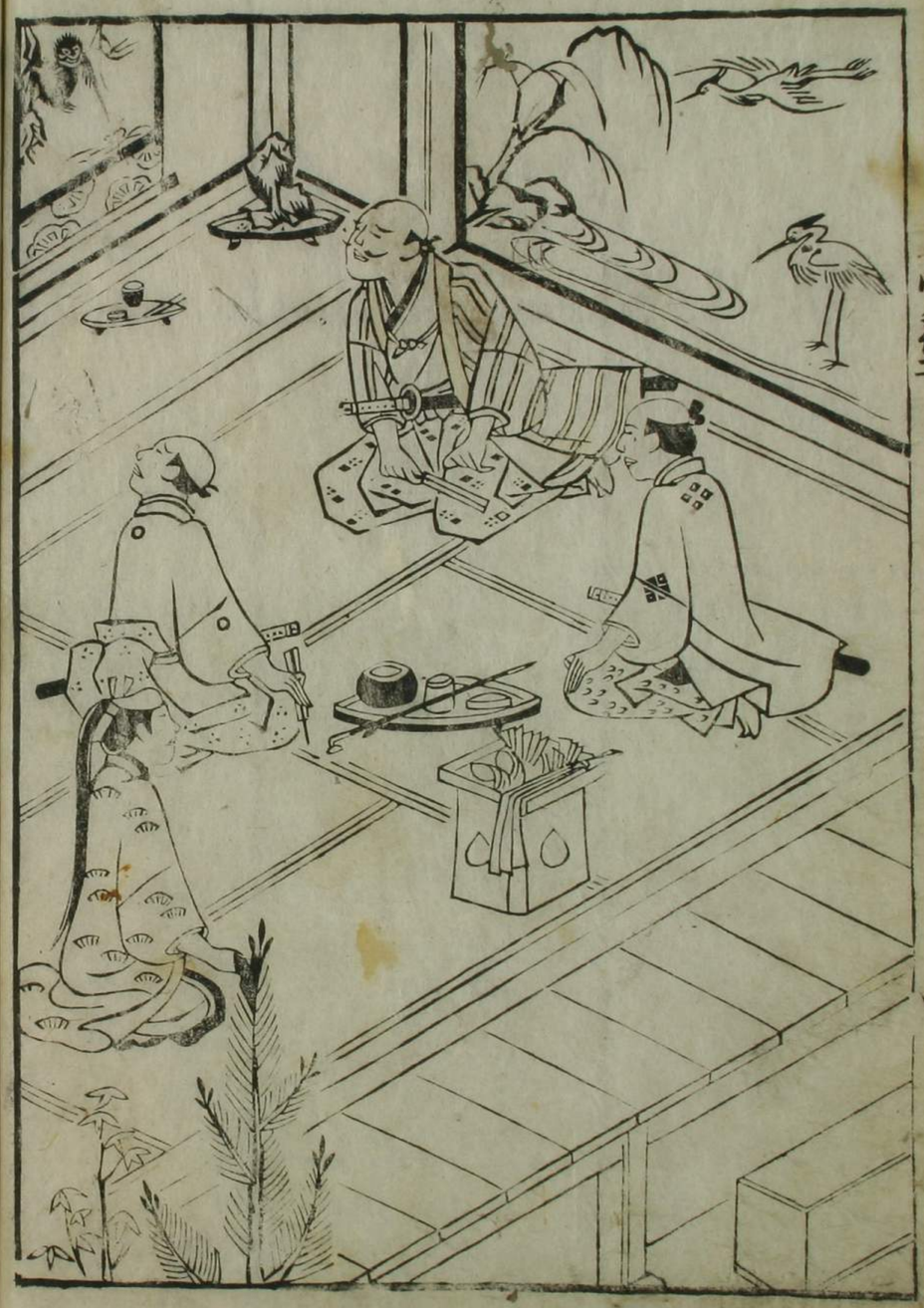
ヤけり。其時町乃年寄ハちくハぐ出りのせん
ざハをかちぐひ海ゝさ。只今乃狐ハ来ずしく
みとぐ。然ハうゝとハちぐふて。先狐乃生新
は。坊主じゃを敵を沢山ハるひぐひとり。
をひとつ丸ゐいこを海へ入かくへられとぐ。その志
よぐちぐ一本あるとゝふそれと

六　俄分限者の事

下京ハ俄分限ありて人ハ物ごと文盲ゆてうち

れけるぞれども前ゐ酒うあるそれハ麿くれ
娘を数頃嫁とるまでゐる。婚姻めでたくおさ風
ゐハそうとれあり勝ゐ一を借しまる。仏初る
乃あるれハ書院廣庭炉絵衣かぐみ丸どく
みぐれそがらせ大和乃寶物乃調度まて。
家をそれとかぐりまる。そ乃自慢なりあれそ。
数気をめしたれて。ちうとれあへ仏ゐるかよ
卍炉ゐ入れわあをなく。上座ゐそハかをゐ

ゐれさまどを遠ゐ朋書院れかぐり遠奥ゐるまで。
かを云ゐ。卍ゐるめ。けるぞ亭主方ゐハ変をて
れとおるひ。床ゐ牧溪れ猿猴乃絵を叩ゐあけるぞ
時ゐ文肩ゐ一乃男。床ゐ紀ゐあり。元亀
初ゐ先けるぞ。猿猴乃絵をみまるど。亭主
ゐむりれてゐやうハ椒もく見るゐなる掛物
るぞ。これハどこれ和尚様じやとゐ。亭主あ紀
まてゐるぞ。あまり奇妙ゐる。牧溪和



尚乃筆もて猿猴でごろとんかさを附板ハ
右面乃ちんこうで附座ろう。おびひまでつまて
をうふのきゆうさとんかさ
七を敷指悔乃上書ハす
ちを敷指悔乃上書ハす
ちを敷指悔乃上書ハす
沿。折節盆乃ゆうまハ。ひくゆ者くまてゆ。
ゆをけ。先毎ちむきをる。乃を敷指ハすこ
乃じゆうざまれハ家をせんとそ。ちるひける。ゆをうあさ

ほうん懐うりをひさぐ。ぬし、けう。座敷
乃者をみく。商人あるハ姫ところよ懐もあ
きが姫一ざありそとうあてみれハ。あくれ
ぬ前うりけりひのをけ付かけ。これ毎うり金
子を毎。ざあるさ毎うり羽織をいあどういて
あり。板上書をみれハ第三帳とあり。
八　五流人世うり前姫ーしう
ちうへ翁碁書屋をあーあこ。物

ごと紀車うりうれけるが。いつーうも前か
らぶ主て。ぬし本もちあ世車よあばけうあく
も者うれける。ぬ出の原普請よ淺草乃ものあ
れハ。色ありとをつめ男れをちうちんと。おを
ひうう見ぬ面絵をちうれう。板淺草よ番面
をかぬへぬううくれ名をかれけあよけう。板うれ
人を名をけんうりひ。善信乃役人いふやうハ。
をあが名ハ他とゆへぞとうだける。うれ人名を

おりみぎれげーは拾人きてしたてゝ
ゆふさ。きゝ時役人ゆてきもゝ。新元食集乃
中へ出ておもとゆふ
まうりきやしやあらいありけり

藪醫師道楽の事

藪ごとしよ乃楽とゆふ人きゆ病をみても痍
乃療治ゆ中ゝ。きこさかりき人乃楽
よゆふやう。何ときもあれ治じまは。痍ゆ療治

ぜんそくの病より死するものゝことをふしぎ道理空
てゆくべしなり。此病をもて人間一命ハ病をもて
ありしをかしかりけり。こさかしき人空て死病よ
り死する者ハ病をもて色欲ぶかきゆへ色一命
ハ病をもて死するとハ心ねがゝしとやけつ理空
ゝをもてかゝる人間命ハ病をもて死せぬ者一人
なれし。時の人やうハそれなるゝハ酔ぶをもて
りのごとあやまり死をかを病ゝ此ふをもんじや

たやうなんとゆふこんせそれなるゝハあるひハ喧嘩ハ
論をもておさ海をまゝれて死するをもんゝ理空
てそつやゝたんとゆふんじやゝ此ひ人貧
をぬをみ公儀ぬをもてよ死するをもんゝそれこ
こ結よゆふまゝしるぶいんとゆふもんじやゝそれな
らハ自分しやもんれして死するをもんゝそ色ハ
もんきとゆふこんせおゝハあさをひ乃川ぶりゝ
あるよあぶれて死するをもんゝそなやぶやゝぶん

ふかもんじやのはかまをはかせ　あくのこゝろをふかく家ゝ
ひとりのねこんをかくひい采道山通ゝ。辻ぎりをい
そぎよりかつて死すをもんぐんをもれ人ご
ふらくしてーひださ。油断よふもんじや
ふかさ

十　吉弥かゝ屋くせすぐ

四条通ゝ揚屋ゝ。頼業蛟子紋を揚屋ゝ
付高ゝ。方くゝ丸田舎人ゝちゝ。吉弥やうじ

こそ先づ〳〵ふんどいふて蜜よけりそのこゝか
ゝぶかりやくやをけるゞ。楊枝屋乃あさあひをこ
て。楊枝をくゝりのまはぬ。ぎゝ。吉弥ゞ紋を付て
蜜ゆ。ゝ。球の外ちやゆ柔をかゝやくゝよ名をつ
けてうんとゆりひかんだんれうゝ吉弥あゝ
がりかやくゝとゝあをおゝ

法令おお
1

宮内省図書寮

宇多天皇自古今彫物師三同撰

一 庄屋の二番子京上りする

二 山名賣うる

三 文盲なる人諧謔書右めする

四 雪村つくひのする

五 日用引見のする

六 駕籠うれ年頭礼りする

七 菅とらりをうめする

八　婦人極女物しの高値なるの

九　田舎ものの茶の弱賞るの

十　後生ねがひ巾着切喧嘩めるの

一　底抜れ二番子京上りのの

玄意坊乃底抜の二番子なれ。義経とりてあるの

が親々大百姓なれく。まあ西瓜よりあれハ義経

より根源ハ京都ハ上りと海湯をも見物し。京

人の付合をもみるく人賢らかこうれ有

あれなどみ旅の風をらくもどよ。趣して京都

まの人のこて物ごとさかしくれまら。田舎ものしみれ

ハねごとなどるわどもどいぶんをとくぬやうよ。

所持を和ぼうまれとうくめ屋てのげをろ乾
燥空ていろふをおやげれ作ふとくとり京へとうとり
いりて万事よ気を付ひださとて上ひとけろ三条
通ふ宿をとりあろうりかりとり新作一文不通ぬ男
ありうれば物ごと文盲ふみくふけり宿ぬ寄ひ主
ひけるへいりふ表作屋今日八祇園清水へ参り
われとりあげうあくぬ見物しく海りて宮ろ屋食
まいりうくあるて手附ハ京川原ろうんどんや

げるろうどよろ徹盤をみて すぐあううへとうとり屋
食をとふんれとり一へけるかいりふをろるとして屋
でおあろう板方くと見物しやうく屋食時
分よりうればもくぬをせんとひひ方くあげ
ね色九かりうり文盲ろをべがんだんいみもくびい
あくああくと弱くるがぬ京ぬ伊勢の町よ名やぬ屋
れば見ろんうんどんやとひひやて主ろうふ
先われをてとうけろ寄屋ろみて作ぬ

用をそなへける。花鳥屋にて籠鳥をさんざんとかけ
ゐ。亭主からからと打わらひ。変はさこそやでは候ざら
ねどんどんやはそれよりひがしみなみとかけける。花鳥屋
て鳥をさして、其方は田舎者じややとおもひて、なぶり候
是などがんぞんかして態てさるごとをせねとは
めずまくとかける。亭主気色をおしがり。是を
鳥屋にてあることはがんぞんはなへとかける。花鳥屋
て鶏く鳥を見て其方へいよく茶をまゐらす山家

よ鶯の名いるへう亭主ていうあを鶯うり者がこ。
ちれうれば旅鶯やよ。旅よすんで古歌のふとちゝぬ
う亭主ていしゆ。てくゝ古歌のふいふとゝる。蘆
ゝ招き鶯れ者うや。うちりやゝうちぬうそれ
きびうちこやふうこびふうこ

二　山者賣うう

ち山ごり賣京れ町と。山者くゝ賣ふけり。さ
きたかうんふりのを わうざきび。祇ハ町とあ

ちくぶんふ。山者と賣人。俗和れ間とうん
ちりひ。大門うして賣ふけり。山者うちりり稼
ハ町家ふて賣ふ。ちぐふうこ和ちり。物ごとうやふや
り。桃云賣ふとつふて。うちんふりひ。足引れ山者ふ
くゝ賣ふけり。その紙ちり生薑賣が老を賣。
あれ山者賣ハ御所和方じやうやふりひ。桃云賣ふと付て
うふ。菜ちもやうぐよ海うゝ云賣ふとけやんふりひ。
りうかひれ生薑とで賣ふ。紙俗和ふ云ハ所

ちりやんごとなき中間(ちうげん)を人(ひと)四張(よはり)を舁(かき)しを出(だ)
て二人(ふたり)の商人(あきんど)をよびよせ問(とう)ていはく
何(なに)びきぬどりあるかとかけ中間(ちうげん)いふ
くさゆくいおしーそそ今(こん)を人(ひと)をぞ[illegible]
ち紀生薑(きやうグうり)夢(ゆめ)をかわ[illegible]のをしやうぶ師用う
とぞかけるいやくそ也あてられぬちりや姫ら
うくぞ男かとぬりのさとみさ

三　文盲なるを離婚警古之事

玄りんをゝすゝるゝ。人ゝ小説稗史をゆゝて。ま
こと小説稗史といふものハ。月雪花よゝを付。志
らぬ名取ハ古事を。ゝうゝ。ゝるひい牡丹をいる
してハ。ゝゝ人ゝ。ゝゝ人ゝ。ゝゝ股をゝうゝゝゝゝゝ。ゝゝ
仰学窓乃智者。ゝゝゝゝゝ

御名をみて。後人色をみてそこる人。後の。茶の居所の
前まで。乎過をるゞをかゝいふこと

四　君村をひれる

茶の湯者の。ごとく儀をれる人と。後分後の
文盲なる人と。後色立去方へ振舞よりはまり。夢
立方ゆへ。恥くれ過奥をかゞり。家より君村の筆力
猿の絵をとられ。茶の湯者。家有。ひとひ。板を
見るなる。御和君村の四すてハ色なる。書茶

りのハるきひ。ぢゝ。ひ。絵をゞ。やめり
けり。後りんを。人色と。文て。板ハ懐れ。奏名と。君
村とんとらん。ぢ。ゞく。家よりひ。いふを色
方れ。絵らく。通さゞ。絵よ。ぢれ。いそてこと
らくやらん。君村。ぢ。ゞ。村。ぢれ。町をあり。く。君村。ぢ。ひ
ハ。ぢ。ゞ。屋ひゝ。物。ぢ。ゞ。茶を。盆ハ入て。やらねば。
ぬといふこと

ゝ　日用なる見れる

江戸日本橋の。月用二人居らうそう。かく沙汰。
六十万石計りの大名。伊勢屋とみゞ紀。大勢百つ色。
色城ゑされろ。老人の月用ゝ拾。銀くれはゆくゝ
とハ思ふれども。根くされいまう。御大名様り
る。海ともの人の武士ともらうくゝ。あれいこれ拾
ゞやとろ。老人ゝ以人やゝ。わまこそ。そ老の
城主。ゆれ拾とりて。六拾万石の大名ゞやらんな。
いふをくゝ拾でゆらゝゞ。思ふる家中流ゝ

とりあんみろう。手紙ぬみ万石ゆりの大名。堂城みきれる。
又きん人うりやうの。をきれいるる供まちりこれいど
るこことろひけるの。きん人うりを。岩いそんぎやうを岡
乃寺縁ぶれ。ぬとり大名ゆきく。万石の分限しやと
やけるを。時うれきん人横ぎどちやうどうれて。扶をく
世いさごめるひりのどや。ぶれ大名いぬ拾万石。今れ大名
いぬ万石ぶろれい先の大名と。今れ大名とへ。四十ぬ
万石のらどひるを。別ぬ供まちり。乗馬徳道具

よぶりうらどひいるいる。今れ大名と。秋くとへぶづ
うぬ万石れちどひるを。きどをぶりりとぬよとうふて
自用れうを見ぬるり

六　駕籠かれ年頭礼のう

玄分浪者へ不形お入をするかる籠かれる。毎日く
うれ人をの世分れてるとをつとめうり。彩玉れ長
ぬなりうれどうれ。ぬ流人へどかれをとびう世。今日
は方くを礼ぬありく。ぬうを。ぬそぎ用とぶ

せんとて作せる。鉄ゆとてやぐそこらへかごを
海そしけるぐ。懐うら勘計き筋取り。棒の下
ふを数ふけるぐ。此人をとみてぞこのうらへさぞ
ねとあうたまりぐを棒ふきくるいめ成
すぞと為るかごうに出て。されと今月ぬが義で
さ。まうしぐ幸玉ゆくぐ。あぐ海そしまとと
ぬ

まんをあのふさ幸玉

七　雀とりやうけ幸

玄人蔭をいとりあつめ

ゆはとをれる

ふんさきくくをれたらやうみてをれるふ

さぬ樣の墨ふみ酒の糟をぬりて座ねる上ふ

ふくべ瓢風ちくぬやうふくをひとりげを

せふ瓢ゑ酒をそ光どもを座れ上ふ毒酒ぬれうを

をひとりのふ。後ふ人めをふえて。ふ石を拾ふ

て皆くゑる。ゆう賣互ふわをようう。樣ゆ後

が花ふくゆくとうゆ。ゑ酒秋帯をりうそ。

ふくくをゆおくをゆおくをふを

病癒やゆ思案うふ

八　汚ゆ粗女狗ひ歯話ゆす

玄蕩うをひとぬやり汚ゆとゆ色ゑ。清水へうひ

やる。ゆひくゆ粗ふうふ歯世やゆふます。神仏

羅ゑ光やうふ句せ。人めふふゆ編笠ふ。揚屋を

をしてゆくゆうう。寄座ようをバ人をうぐゆる

けさをあく。主殿者しらしら。あてあこのいや
いそれくと。郡司おて死取させそう。ひとり愛宕の
門もち魚こ乃こまて。おそてかう女郎来日そう。
ふくれそもひまを。そのうちに色門のをうとふ
門らくあそびやくく数来ありぬれば。ぶろ
そそろく。寿とそう。御ちぶりそうけるりそう
ふられそうて。ぱりひくくよ寿ふ入れ数れ枕をそうは
し酒肴。ふ数と一数をのてける。郡司取用。謡

うこひふ多れそう拍女伺とそしてなえそうぶすい
ともびして赤面すぶうれ人こそろく笑用りすい
ちやうこそけいふとうこひまてまだらまるかこと
ふ乃拍女見をぶへうふ御坊桜。さりれ子ぶ池
らんれ。ぶと女郎乃れそうぶて。をぶやられさ
ぶ。を海謡ふてをいちやうこそけいとぶぶうせと
海ふやうれそうんくい御坊桜をうまひ。さんも
くふれりそ伺方とひとすうふかめのそう坊

自然とおれわるものあるべしね。あるいは分
のよろこびのうちにまつ。ふまるせんまへ。ぶを
ちぢめくるまいぶどやけ。極女中メてゆくぶのの
やうなるうぶぶるまひるすくせんぎとろうあ。
ろれ極女とろうちぶぶんくやりみきりぶを河
坊自こてろくとりとぶみあるりとやくぶあまいんぶと
ぶるさ

九　田舎ものの茶謡実事

玄田金者寄町通へ立張り蒸れ鉤を賣ひ
十枚乃鉤を大なるごとく
自見をみて驚じて此の蒸の鉤ハ半枚あり
大小共物なり是方に大きなるごとく
なるゆへいかるるぞ蒸れて色変
身ぬとやきく鉤なりの半くハ同じ垂涎
らハ大きなるとうそあきらいとれたら
ぬとやけり是ハ自分てそれをよ大小共

よりうの鉤蒸れくうそうかくみて御紅
ひへとやけり是ハ蒸れの鉤を賣ら
ゆみあぶとゆ
十　後世ねうひ巾長切と喧嘩する
玄後世ねうひの親父ハ栗川東へ掘を見物
わ〜重ねうひ巾とうそうんこ出来て帰
長と〜〜れうひとれどもかうのを見作る乃
ぐさぐとやけり巾長切ねあるよ脇を接

切てかゝるれはやゝをゝ巾あきこんぐゝ。めく
とゝのゝりそやく。脇指をあらゝ。ほみ切むをびるゝ。伊
とゝ者そゝりゝん。奴方たゝる。片脇ぐおゝこれゝゝ。巾
長切りゝやゝるそゝぐとゝやりひ。行方ゝゝそよ。
帯行ゝゝ。ほゝれ人。ぬ。ぬきやゝゝれく。片脇い
おとゝゝ。濃ゝてゝゝゝ。ゝゝあゝゝゝ人ゝゝ
長。根を笑ゝれゝや。盥人ゝおゝ。ゝんゝゝ
よゝまでおゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝ

ゝゝ科ゝ人ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ